

研究ノート

現代社会における仏教的ナラティブの現状と展望

中井本蓉

一、問題の所在

「宗教離れ」が叫ばれて久しい。NHK放送文化研究所が国際比較調査グループ（ISSP）の一員として、二〇一八年に国内で実施した「宗教」に関する調査によれば、十八〜三十九歳の男性で「信仰心はまったくない」とする人の割合は、二〇一八年の時点で全体の四割を超えている。また、十八〜三十九歳の女性に関しては、一九九八年の時点では二十二パーセントの人が「信仰心はまったくない」としているのに対して、二〇〇八年は十九パーセントに減少したが、二〇一八年は三十四パーセントと大幅に増えている。¹

このような状況を打破するために、宗教者は様々な対策を講じてきたはずである。しかし統計をみれば、それらの対策が功を奏しているとはいえず、「宗教離れ」に歯止めがきかないというのが現状である。

今回の発表では、「なぜ世間は宗教から離れてしまったのか」という問題に対し、「ナラティブ」という概念を用いて、仏教側からどのようなアプローチをしていくべきかを考察する。

二、ナラティブとは

「ナラティブ」(narrative) という言葉はまだ定義があいまいな言葉であるが、辞書によれば「物語」あるいは「語ること」という意味である²。しかし、「物語」を意味する英単語としては「ストーリー」(story)の方が馴染みがあるように思われる。この二つの単語の違いとは何だろうか。

「ストーリー」は、始まりから結末までがすでに決定している「物語」である。これは「ストーリー・テラー」(story teller) という用例からも汲み取ることができる。たとえば講談師は軍記、武勇伝、仇討ちなどの読み物を大衆におもしろく読み聞かせるが、このとき読まれる「物語」は結末が決まっています。講談師はそれを覚えて話す。つまり「ストーリー」とは、本などのテキストの形で保存され、内容が変わらずに伝えられていく「固定的な物語」なのである。

一方、「ナラティブ」は「語る」という行為に重点が置かれた「物語」である。「ナレーター」(narrator)や「ナレーション」(narration)など、われわれ日本人に馴染みのある語とも関連する。「ナラティブ」とは、固定的な結末を持たず、語る者によって結末が変わるという「開放的な語り」なのである³。また、「ナラティブ」が語られるときには、「地域または組織の中の共通認識のようなもの」が土台となる。

三、ナラティブの活用例

次に、「ナラティブ」という概念を活用した事例を三つ紹介し、あわせて各分野に対応する宗教者としての役割についても考察する。

【ビジネス】 ナラティブ・マーケティング………布教

【医療】 ナラティブ・ベイスト・メディスン………救済

【教育】 ナラティブ・エデュケーション………教化

まず一つ目は、【ビジネス】の分野における「ナラティブ・マーケティング」である。自社ブランドの車の性能をアピールするような従来の手法は「ストーリーテリング型マーケティング」と呼ばれており、固定的な価値観（ストーリー）を顧客に提供し、商品を購入させるといったものであった。これに対して、「自分が主人公である」という当事者性を顧客に持たせるのが「ナラティブ・マーケティング」である。SUBARUが展開する一連のコマーシャル群「Your story with」はその好例である。映像の中では、一台の車と、その持ち主の人生のさまざまなシーンが切り取られており、車と持ち主が紡ぎ出す「物語」を見せている。これによって、このコマーシャルの視聴者はそこに自分を重ね合わせ、「自分はどんな物語を作っていくのだろうか」と想像する。これが「当事者性を持たせる」ということである。こういったマーケティングをする際には、ブランドの商品が展開する世界観に顧客を引き込む「物語力」が求められる。このマーケティング手法を宗教者が行う「布教」という活動に應用すると、自分の宗派の教義や開祖のすばらしさを伝えるだけでなく、その宗教的な世界において「自分も関係（役割）があるのだ」と思わせ、世間の人々がみずから踏み込んでくるような「語り方」をする、ということになる。これは実に、理想的な宗教への近づき方を示しているといえるのではないだろうか。まさに宗教者にも、知識だけでなく「物語力」が必要とされる時代になってきているのである。

二つ目は、【医療】の分野における「ナラティブ・ベイスト・メディスン」（物語と対話にもとづく医療）である。医療従事者は、患者が語る患者自身の物語に耳を傾け、患者が抱える問題を全人的に（身体面だけでなく、精神や心

理状態、社会的立場などを含むあらゆる要素から）把握し、治療方法を考える。従来行われてきた「エビデンス・ベイスト・メディスン」（科学的根拠にもとづく医療）ではカバーしきれない症例（高齢者、死に至る病氣、精神に關する病氣など）に対するアプローチとして提唱されたものであり、患者と医療従事者が対話を通じて信頼關係を作り、双方にとって満足度の高い治療を行うことが目的とされる。ところで、「臨床宗教師」という資格が作られたことからわかるように、宗教者が世間から求められる大きな役割のひとつとして、苦しみの中にある人の「救済」が挙げられるだろう。ここでいう「苦しみ」は病氣に限ったことではないが、医療現場でのこうしたナラティブの活用例は、大いに参考になる。仏教の教義をエビデンスとするならば、ナラティブの活用によって相談者と僧侶の間に信頼關係を築くことは、まさに「仏教に興味はあるがお坊さんに相談したいとは思わない」という「僧侶離れ」を食い止めるひとつの手立てとなるのではないだろうか。

三つ目は、【教育】の分野における「ナラティブ・エデュケーション」である。教師が主体で、子どもが客体というのが従来の教育現場の構造であり、子どもは一方的に与えられる知識を暗記し、再生することが求められてきた。しかし、これでは子どもの主体性が育たない。「ナラティブ・エデュケーション」の現場では、教師から知識を与えられることに加えて、子どもたちがクラスメイトと対話（ナラティブ）をしながら学ぶことによって、思考し、発信する力が育っていく。これは変化の激しい時代に、他者とともに問題を解決していく能力を持った人材を育てることを目的としている。このような人材は、宗教者の中にももちろん求められている。従来の子弟教育の手法を見直し、より時代の変化に対応できる人材の育成を、宗教者も意識すべき時が来ているのではないだろうか。また、このような主体性を育てるアプローチは、檀信徒教育の場にも応用できる。出家者・在家者の両方に対する、宗教の世界に入ったあとの「教化」の新しいアプローチ方法として、この「ナラティブ・エデュケーション」という取り組みは、大いに参考になるのではないだろうか。⁴

四、仏教的ナラティブのポテンシャル

ここまで、ナラティブとその活用例について概観してきた。次に、ナラティブという概念を用いて、仏教の現状を見てみたい。

まず、仏教的文脈あるいは仏教用語を用いて語られるナラティブを「仏教的ナラティブ」と呼び、次の三種類に分類する。

- (1) これまでの僧侶が語る仏教的ナラティブ（旧型）
- (2) 世間の人々が語る仏教的ナラティブ（世俗型）
- (3) これからの時代に僧侶が語るべき仏教的ナラティブ（新型）

かつて、「旧型仏教的ナラティブ」は、社会の中で理解され、通用していた。しかし、時代とともに社会の価値観が変化しているのに、僧侶が依然としてこの「旧型仏教的ナラティブ」によって語り続けた結果、人々の心に言葉が届かなくなってしまうのが現状ではないだろうか。また、かつての古い時代を知っている世代が残っているの、なんとか対話が成立しているが、このまま同じナラティブで語り続けた場合、社会の誰からも理解されなくなり、消滅する可能性がある。

「地域または組織の中の共通認識のようなもの」がナラティブの土台となる、と先に述べた。「旧型仏教的ナラティブ」が通用しなくなった背景には、「僧侶（仏教）の共通認識」と「世間の共通認識」とのズレが原因としてあるのではないだろうか。

五、ツイッターから見いだされる仏教的ナラティブの諸相

「旧型仏教的ナラティブ」は、もはや世間の人々の心に響かなくなっている。しかし、仏教そのものが必要とされていないわけではないであろう。テレビ番組『ぶっちゃけ寺』が人気を博したことからも、世間の人々は仏教に対して強い関心を持っていることがわかる。

ここで視点を変えて、「世俗型仏教的ナラティブ」（世間の人々が語るここ最近の仏教的ナラティブ）とはどのようなものか見ていきたい。若年層の利用者の割合が比較的多いとされるSNSのツイッターは、文字中心の投稿になるため、仏教用語活用の現状を調査するには適していると考えられる。今回は検索機能を利用して、次の三つのキーワードについて検証した。

検索キーワード……【成仏】【徳を積む】【来世】

まず、【成仏】というキーワードで検索した結果、次のような投稿が出てきた。

- ① 「メイクいい感じだったのにはほほ誰にも会わなかったので成仏させてください」（自分の顔の写真が添付されている）
- ② 「セブンで衝動買いたお前の事完全に忘れてた 今日成仏させてやろう」（冷凍たこ焼きの写真が添付されている）
- ③ 「Continue?の消しゴムハンコ 使う場所ないのでここで成仏させて下さい！」（消しゴムハンコを押した写真

が添付されている)

④ 「先月亡くなったおばちゃんが生き返っていて笑いながらお茶が欲しいと言うので熱いお茶を煎れる夢を見たので納骨堂にお茶をお供えしてきました。あー、四十九日になるのかな。無事成仏したのかな。お赤飯が好物なんで炊こうかね。」

これらはほんの一例であるが、見てわかるとおり、【成仏】という言葉の本来の仏教的意味（仏になること）とはかけ離れた意味で使われている。①②③は、その目的を達成できなかったものたちの無念を晴らすことを「成仏」と呼んでいる。この用例が最も多かった。そして④は、いわゆる「御霊がやすらかでありますように」という願いを込めた「成仏」の用例である。

次に、【徳を積む】というキーワードで検索した結果、次のような投稿が出てきた。

- ① 「残業という苦徳を積むと色違いが出やすい気がする #ポケモンGO」
- ② 「ちょこちゃんもバルちゃんもシャツスもユウくんも欲しいでしょう私 とりあえずこれから徳を積むしかないな いい子でいますー！」
- ③ 「来世はマジのマジでクリステン・スチュワートの外見になりたいので、今生で徳を積むしかない」

主に「良いことが起きることを願って善行を行う」という意味で使われている。ただ、その願いである「良いこと」には、①②のように「オンラインゲームで欲しいアイテムが手に入ること」も含まれる。③の「来世、あこがれの女優のような顔に生まれるために今生で徳を積む」という用例は、「来世」の用例でもある。

最後に、【来世】というキーワードで検索した結果、次のような投稿が出てきた。

- ① 「この距離であなたと話せるなら 僕は来世カメムシにでも豚にでも蚊にでもなる」
- ② 「来世虫に生まれ変わっても仕方ないと思えるほどの距離でした。取り急ぎ皆さまにもこの幸福を伝えたいです」

③ 「長瀬剛のオンラインライブ見てる。頑張ってる人見ると、前は私も頑張ろう！って思ってたけど、最近私も来世はもっと頑張れるひとに生まれてこようってなってきた……やばい」

「来世」の用例があるということは、輪廻転生⁵を信じているということにつながる。ただ、①②のように「好きなお笑い芸人に近距離で会う」「憧れのアイドルと間近で話す」などの幸せな経験をすると、なぜか「来世は虫に生まれ変わる」という独特の理論が存在している。また、③のように、今生で努力することを諦めて、「来世はもっと頑張れる人に生まれてこよう」と考えてしまう自分の意欲のなさに危機感を感じている用例もある。来世がある種の「逃げ場」になっているともいえるだろう。

以上、三つのキーワードで検索して、「世俗型仏教的ナラティブ」とはどのようなものかを見てきた。いずれのキーワードも、【成仏】用例④を除いて、あまり宗教的でなく、日常的な感覚で使われているという印象がある。このことから、「旧型仏教的ナラティブ」が通用しない時代になってきているものの、仏教用語は日常の中に溶け込んでいるということがわかる。また、若者の文化の中に仏教用語が残っているという現実は、仏教と世間との間に本当の意味での「乖離」がまだ起きていないということを示している。

六、小結

「旧型仏教的ナラティブ」において、まず問題となるのはその「語り方」である。世間が変化しているにも関わらず、かつての時代の「語り方」を継続してきた結果、世間の人々との間にズレが生じてきている。これからの時代には、客観的な情報としての知識をただ伝えるのではなく、未完結の物語の登場人物の一人として聞き手を参加させるような語り方 (Dayakausalya 善巧方便) が求められる。このような「新型仏教的ナラティブ」ともいべき「新しい語り方」⁷を習得するためには、「三、ナラティブの活用例」で見えてきたような、時代に適応したアプローチ方法が参考となるだろう。⁸新しい語り方 (新型仏教的ナラティブ) を使っていくことによって、離れかけていた仏教と世間とが再び重なり合い、かつて構築されていたような関係性を、現代的な形で取り戻すことができるのではないだろうか。

最後に、ウィルフレッド・キャントウエル・スミス (一九一六―二〇〇〇) が『世界神学をめざして』 (一九八一年) の中で、宗教と世間との関係性について述べた一文を紹介し、結びにかえたい。

要するに、世界の宗教共同体、および世俗的共同体が歴史的に共有していることは、ダイナミックな多様性と一貫性の中にある過去、というますます増大する共通認識であり、またますます増大する共通の未来に対する責任と関わりの意識である。⁹

〔参考文献〕

- ポール・リクール (RICOEUR, Paul)
 一九七八 「諸解釈間の葛藤」（長谷正当訳、『現代哲学の根本問題』第七卷「解釈学の根本問題」、晃洋書房、三六三―三九〇頁）
- ウィルフレッド・キャンントウエル・スミス (SMITH, Wilfred Cantwell)
 二〇一〇 『世界神学をめざして―信仰と宗教学の対話―』（中村廣治郎訳、明石書店）
- ヘイドン・ホワイト (WHITE, Hayden)
 二〇一七 『歴史の喩法―ホワイト主要論文集成―』（上村忠男訳、作品社）
- 岡田文弘 二〇二〇 「日蓮聖人の上行自覚」（『現代宗教研究』第五十四号、一三八―二五六頁）
- 小林利行 二〇一九 「日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか―ISSP国際比較調査「宗教」日本の結果から―」（NHK放送文化研究所編『放送研究と調査』第六十九巻第四号、五二―七二頁）
- 下田正弘 二〇一六 「仏教研究の死角―ウィルフレッド・キャンントウエル・スミスの理解から―」（『三友健容博士古稀記念論文集 智慧のともしび―アビダルマ仏教の展開―』インド・東南アジア・チベット篇、山喜房仏書林、八三一―一〇二頁）
- 鈴木智雄 二〇二〇 「公共空間での心のケアを提供する宗教者の養成について―教師教育プログラムへの反響―」（『現代宗教研究』第五十四号、二六八―二七四頁）
- 高野光拡 二〇二〇 「布施行と幸福感に関する研究」（『現代宗教研究』第五十四号、二八六―二七五頁）
- 橋本陽介 二〇一四 「ナラトロジー入門―ブロップからジュネットまでの物語論―」（水声社）
- 堀田泰寛 二〇二〇 「現代語による法要式の試みについての考察」（『現代宗教研究』第五十四号、二五七―二六七頁）
- 望月海慧 二〇二〇 「輪廻転生はどのように説かれるべきか」（『教化学研究』第十一号、九三―一〇八頁）

1 小林利行「二〇一九」五三一―五四頁を参照。

2 橋本陽介「二〇一四」四六一―四七頁には、「物語」の説明として次のように述べられている。

「このように、ナラトロジーとは語るという行為 (narration) によって生まれる「物語text」の科学とされる。ここまで特に断りなく「物語」という用語を使用してきたが、ナラトロジーの理論で言うフランス語の *le récit*、もしくは英語の *narrative* の訳語として使用している。これはナラトロジーの訳語が「物語論」で定着しているからである。ここで、ナラトロジーで議論された「物語」の定義について整理しておこう。プロップやレモン、バルトの分析を紹介してきたが、そこでは、「機能」、つまり物語の時間を展開させる行為が主な分析対象となっていた。その後のナラトロジーの研究もまとめて言うならば、「物語」とは次のようにまとめることができる。時間的展開がある出来事を言葉で語ったもの。」

3 ヘイドン・ホワイトは「二〇一七」において、「物語を、現実界のものであると想像界のものであると出来事についての表象の形式 (a form of representation) としてよりは語り方 (a manner of speaking) としてとらえるべきであるとする考えは、構造主義の到来を受けて生じ、ヤールコブソン、バンヴェニスト、ジュネット、トドロフ、バルトらの仕事と結びつけられている言述 (discourse) と物語 (narrative) の関係についての議論のなかで、近年練りあげられてきた。そこでは物語は、ジュネットが言うように、より「開かれた」言述形式ならば話し手に押しつけることはないような「一定数の排除と制約条件によって」特徴づけられる語り方であるとみなされている」(一一九頁)と述べており、「物語」はあくまで「表象の形式」ではなく、「語り方」なのであって、その言説は「閉ざされた」ものではなく、「開かれた」ものなのである。

4 試みに、「現代宗教研究」第五十四号の「研究ノート」に掲載された四つの論考を、今回紹介した三つのナラティブ活用例に分類してみた。

① 岡田文弘「日蓮聖人の上行自覚」……ナラティブ・マーケティング【布教】

日蓮聖人は「法華を行ずるものは上行に守護されながら、自らも上行のように振る舞うべし」と考え、自身にも弟子にもそのような自覚を課していたのではないか、というのがこの論考の結論であろう。そして、「我々門下も上行(と

しての宗祖）のご加護を受けつつ、我々自身も「上行として」活動することを目指すことが、あるべき姿なのでは」と提言している。これはまさに、「上行菩薩たる日蓮聖人が、お題目を唱えるわれわれを守護してください」だけでなく、「われわれもまた上行菩薩として法華経を生きなければならない」という提言であり、日蓮門下としての「当事者性」を新たに持ち、「日蓮聖人の生きた法華経の世界」に参加するということにもなる。これを教師が十分に自分のものとし、「語り」に活かしたとき、新たな布教（ナラティブ・マーケティング）が展開されるのではないだろうか。

②堀田泰寛「現代語による法要式の試みについての考察」……ナラティブ・エデュケーション【教化】

この論考では、現代語化された法要式と現代語訳『法華経』によって法要を執り行っている実在の日蓮宗寺院を例に、現代語による法要式の可能性と将来の展望について考察されている。その背景には、日本の仏教教団の多くが、伝統的な宗教儀礼を執り行う上で、新しい価値観や生活様式との間に生じるギャップに直面していることと、法要の内容についても、参列者から「わからない」「退屈である」という意見があがっているという現状がある。これに対して、現代語訳の『法華経』を読むことは、法要参列者と「聖なる時間の共有」を持つことにつながる。ただし、聖典を現代語訳して読むことよって「儀礼性」が低下するという問題もある。「法要式の現代語化の試みと従来の法要式を継続してゆく試みは決して対立するものではなく、お互いが様々な試行錯誤と建設的な批判を繰り返しながら、新たな法要式として高度な水準へと止揚されるべき関係であると考えられる」とこの論考では結論づけられている。注目すべきは、例として紹介された現代語訳『法華経』の最大の特徴が、「その内容が参列者に語りかける形が強調されていること」である、という点である。これは『法華経』と参列者との対話であり、在家者に向けた新しい教化（ナラティブ・エデュケーション）と言えるだろう。

③鈴木智雄「公共空間での心のケアを提供する宗教者の養成について―教師教育プログラムへの反響―」

……ナラティブ・エデュケーション【教化】からナラティブ・ベイスト・メディスン【救済】へ
 この論考は、教師資格取得過程に「グリーンケア」（悲嘆ケア）や「傾聴」を取り入れるという試みを行なっている宗派の活動を紹介し、臨床宗教師のような既に教師資格を取得した者だけでなく、教師育成の段階から「傾聴」の姿勢

を学んでいくことの重要性を指摘するものである。身近な人の死に直面した人を支える活動であるグリーフケアは「傾聴」という姿勢を重んじ、「相手の言葉を受け止める」ことを重視するのであって、自分の宗派の教義・教学に照らし合わせて「答えを出す」ことではない。真宗大谷派は、グリーフケアに関する諸事業を展開する一般社団法人「リヴオン」と提携し、教師資格取得過程にグリーフケア研修を導入している。また、臨済宗妙心寺派では、花園大学に設置された妙心寺派僧侶養成課程において、「傾聴基礎講座」を開講している。これらの研修や講座では講義だけでなくワークショップも行われる。立正大学や身延山大学でも、僧階を得るための取得単位として「仏教カウンセリング」や「仏教デス・エデュケーション」などの科目があり、「傾聴」の姿勢や「死生観」を扱った講義に触れる機会は用意されている。しかし、真宗大谷派や臨済宗妙心寺派の取り組みにおいて特筆すべきは、「傾聴」や「グリーフケア」に特化して、講義中心ではなく、ワークショップのような双方向的で実践的な学びを教師育成の段階から取り入れているという点である。このような新しい教師育成の取り組みは出家者に向けたナラティブ・エデュケーション（教化）といえるし、ここで学んだことを教師が現場で活かせば、それはナラティブ・ベイスト・メディスン（救済）となるだろう。

④ 高野光弘「布施行と幸福感に関する研究」……ナラティブ・エデュケーション【教化】

この論考は、布施行という利他的な行為と、布施した本人が感じる幸福感との関連性を論じたものである。『雑宝蔵經』巻第六に説かれる「七種施」をもとに、「家族」「友人・知人」「他人」という三種の人々に対して布施行（人に優しく接するという行為）を実践しているかどうか調査するアンケートを、寺院の行事に参加していた男女九十名に実施している。そこから得られた結果というのは、まず「家族に対する布施行」を意識している人ほど幸福感が高いということである。そしてもうひとつの興味深い結果は、「因果応報」をどの程度信じるかと言うことと、友人知人や他人への布施行為との間に、関連が見いだされたということである。「因果が巡り巡るといふ仏教的な信念を持つことは、身近ではない他者へ優しく接することに寄与していると言えよう」と筆者は述べている。③の論考で述べられた、「グリーフケア」や「傾聴」を学ぶという行為はあくまで他者を救うための学びであるが、この布施行という行為は「巡り巡って自分のためになる」という自分のための学びである。さらに、「与え手と受け手の考えが噛み合わない布施行為は

ただの自己満足や押しつけになる可能性もある」と筆者が指摘するとおり、布施行とは与え手と受け手の対話がなければ成り立たない。この調査結果をもとに布施行（人に優しく接するという行為）とは何かを考えると、それは出家者・在家者ともに関係するナラティブ・エデュケーション（教化）であり、自分中心の新しい学びの手法であるといえるだろう。

以上四つの論考の分類をまとめると次のとおりである。

- ①「ナラティブ・マーケティング」（在家者向け）
 - ②「ナラティブ・エデュケーション」（在家者向け）
 - ③「ナラティブ・エデュケーション」（在家者向け）「ナラティブ・エデュケーション」（出家者向け。他者中心の学び）であり、これを実践することによって「ナラティブ・ベイスト・メディスン」となる。
 - ④「ナラティブ・エデュケーション」（出家者・在家者向け。自分中心の学び）
 - 5 この「輪廻転生」の問題については、望月海慧「二〇二〇」を参照。
 - 6 ヘイドン・ホワイトは「二〇一七」において「彼らは過去についてストーリーを語ることを拒絶した。というより、始まりと中間と終わりというはつきりとした段階をもったストーリーを語ることをしなかった。そして彼らの関心を惹いた出来事の経過にわたしたちが通常ストーリーを語ることに結びつけている形式を押しつけることをしなかった。たしかに彼らは彼らが調べあげた証拠の内部または背後に存在するのを感じた、あるいは感知したと考えた現実についての報告を物語る（narrate）ことはしたが、その現実を物語化（narrativize）することはせず、その現実にはストーリーの形式を押しつけることはしなかった」（二一八一―一九頁）と述べている。
 - 7 下田正弘氏は、聖典が人間にとって特別な存在となるのは、「二重の環境」（現世的／超越的、有限／無限）を生きているからであるという、ウィルフレッド・C・スミスの言葉を引用しているが（下田「二〇一六」九八頁）、スミスが「二重の環境」を生きていた歴史的人物として名前を挙げているのは、日蓮聖人なのである。（傍線部はスミス引用文）
- この「二重の環境」のもとでこそ、聖典は特別な存在となる。それをスミスの慧眼は、驚くべきことに、日蓮の聖典観

に見出している。

考察の過程で、聖典において、そして聖典をとおして関与されているものの超越的性質というこの感覚が活発にはたらいっているのをくりかえし観察してきた。これは、つねに潜在的であるが、しばしば顕在的ともなり、強調されることもすくなくない。日蓮が、聖者たちが聖典のなかに見出す真理を「尽きせぬもの」というとき、かれは、仏教にとどまらず、多くのさまざまな共同体の聖典主義者scripturalistたちを代弁している。手にされた、あるいはここにころにある、この有限の作品が、目に見える以上のものを秘蔵していると感じ、言うことは、至極まつとうである。聖典に関するこうした理解が生まれるところには、人間が、自身の把握能力を超えた究極的実在に関わろうとし、たとえその実在の部分的な光景にふれえたとしても、それがさらに言語を超えているという事態の把握がある。聖典は、この事態全体を言語化したものであるから、その言語はあくまで実在の象徴であり、この言語をおさめた聖典も、象徴そのものとなる。(下田「二〇一六」九九頁)

8
ヘイドン・ホワイトは「二〇一七」において「物語（ナラティブ）の性質にかんする問題を提起するとすると、文化の性質にかんする省察、そしておそらくは人間性そのものにかんする省察すらもが避けられなくなる」（一一七頁）と述べているように、「物語性」の追求をした際に最も重要となってくるのは「人間性」なのである。

9
ウイルフレッド・キャンントウエル・スミス「二〇二〇」三〇六頁を参照。